

問うて云はく、法華經の第一方便品に云はく「諸法実相乃至本末究竟等」云云。此の經文の意如何。答へて云はく、下地獄より上^{しも}上^{かみ}界までの十界の依正の当体、悉く一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりと云ふ經文なり。依報あるならば必ず正報住すべし。釈に云はく「依報正報常に妙經を宣ふ」等云云。又云はく「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土」云云。又云はく「阿鼻の依正は全く極聖の自心に処し、毘盧の身土は凡下の^{びる}一念を^{ほんげ}逾えず」云云。此等の釈義分明なり。誰か疑網を生ぜんや。されば法界のすがた、妙法蓮華經の五字にかはる事なし。釈迦・多宝の二仏と云ふも、妙法等の五字より用の利益を施し給ふ時、事相に二仏と顯はれて宝塔の中にしてうなづき合ひ給ふ。

かくの如き等の法門、日蓮を除きては申し出だす人一人もあるべからず。天台・妙楽・伝教等は心には知り給へども言に出だし給ふまではなし、胸の中にしてくらし給へり。其れも道理なり、付囑なきが故に、時のいまだいたらざる故に、仏の久遠の弟子にあらざる故に、地涌の菩薩の中の上首唱導上行・無辺行等の菩薩より外は、末法の始めの五百年に出現して法体の妙法蓮華經の五字を弘め給ふのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顯はすべき人なし。是即ち本門寿量品の事の一念三千の法門なるが故なり。されば釈迦・多宝の二仏と云ふも用の仏なり。妙法蓮華經こそ本仏にては御坐し候へ。經に云はく「如来秘密神通之力」是なり。如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし。凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり。然れば釈迦仏は我等衆生のためには主師親の三徳を備へ給ふと思ひしにさにては候はず、返つて仏に三徳をか^被ぶらせ奉るは凡夫なり。其の故は如来と云ふは天台の釈に「如来とは十方三世の諸仏・二仏・三仏・本仏・迹仏の通号なり」と判じ給へり。此の釈に本仏と云ふは凡夫なり、迹仏と云ふは仏なり。然れども迷悟の不同にして生仏異なるに依つて、俱体俱用の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり。さてこそ諸法と十界を挙げて実相とは説かれて候へ。実相と云ふは妙法蓮華經の異名なり。諸法は妙法蓮華經と云ふ事なり。地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相なり、餓鬼と変ぜば地獄の実のすがたには非ず。仏は仏のすがた、凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが妙法蓮華經の当体なりと云ふ事を諸法実相とは申すなり。天台云はく「実相の深理、本有の妙法蓮華經」云云。此の釈の意は実相の名言は迹門に^{ぬし}主づけ、本有の妙法蓮華經と云ふは本門の上の法門なり。此の釈能く能く心中に案じさせ給へ候へ。

日蓮末法に生まれて上行菩薩の弘め給ふべき所の妙法を先立ちて粗^{ほぼ}ひろめ、つくりあらはし給ふべき本門寿量品の古仏たる釈迦仏、迹門宝塔品の時涌出し給ふ多宝仏、涌出品の時出現し給ふ地涌の菩薩等を先づ作り顯はし奉る事、予が分齊にはいみじき事なり。

日蓮をこそにくむとも内証にはいかゞ及ばん。

さればかゝる日蓮を此の島まで遠流しける罪、無量劫にもきえぬべしとも覚えぬ。譬
喩品に云はく「若し其の罪を説かば劫を窮むるも尽きず」とは是なり。又日蓮を供養し、
又日蓮が弟子檀那となり給ふ事、其の功德をば仏の智慧にてもはかり尽くし給ふべから
ず。経に云はく「仏の智慧を以て多少を籌量すとも其の辺を得じ」と云へり。地涌
の菩薩のさきがけ日蓮一人なり、地涌の菩薩の数にもや入りなまし。若し日蓮地涌の菩
薩の数に入らば、豈日蓮が弟子檀那地涌の流類に非ずや。経に云はく「能く竊かに一人
の為に法華経の乃至一句を説かば、当に知るべし是の人は則ち如来の使ひ、如来の所遣
として如来の事を行ずるなり」と、豈別人の事を説き給ふならんや。されば余りに人の
我をほむる時は如何様にもなりたき意の出来し候なり。是ほむる処の言よりをこり候ぞ
かし。末法に生まれて法華経を弘めん行者は、三類の敵人有つて流罪死罪に及ばん。然
れどもたへて弘めん者をば衣を以て釈迦仏をほひ給ふべきぞ、諸天は供養をいたすべき
ぞ、かたにかけせなかにをふべきぞ、大善根の者にてあるぞ、一切衆生のためには大導
師にてあるべしと、釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏菩薩・天神七代・地神五代の神々・鬼
子母神・十羅刹女・四大天王・梵天・帝釈・閻魔法王・水神・風神・山神・海神・大日
如来・普賢・文珠・日月等の諸尊たちにほめられ奉る間、無量の大難をも堪忍して候な
り。ほめられぬれば我が身の損ずるをもかへりみず、そしられぬる時は又我が身のやぶ
るゝをもしろずふるまふ事は凡夫のことはざなり。

いかにも今度信心をいたして法華経の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給ふ
べし。日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟
子たる事あに疑はんや。経に云はく「我久遠より來是等の衆を教化す」とは是なり。
末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現
に非ずんば唱へがたき題目なり。日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが、二人三
人百人と次第に唱へつたふるなり。未来も又しかるべし。是あに地涌の義に非ずや。剩
へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的とするなるべし。と
もかくも法華経に名をたて身をまかせ給ふべし。釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏菩薩、虚
空にして二仏うなづき合ひ、定めさせ給ひしは別の事には非ず。唯ひとへに末法の令法
久住の故なり。既に多宝仏は半座を分かちて釈迦如来に奉り給ひし時、妙法蓮華経の幡
をさし顯はし、釈迦・多宝の二仏大将としてさだめ給ひし事あにいつはりなるべきや。

併ら我等衆生を仏になさんとの御談合なり。

日蓮は其の座には住し候はねども、経文を見候に少しもくもりなし。又其の座にもや
ありけん、凡夫なれば過去をしらず、現在は見へて法華経の行者なり、又未来は決定と
して当詣道場なるべし。過去をも是を以て推するに虚空会にもやありつらん、三世各別
あるべからず。此くの如く思ひつゞけて候へば流人なれども喜悅はかりなし。うれしき
にもなみだ、つらきにもなみだなり。涙は善悪に通ずるものなり。彼の千人の阿羅漢、

仏の事を思ひいでて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華經と唱へさせ給へば、千人の阿羅漢の中の阿難尊者はなきながら如是我聞と答へ給ふ。余の九百九十九人はなく涙を硯の水として、又如是我聞の上に妙法蓮華經とかきつけしなり。今日蓮もかくの如し。かゝる身となるも妙法蓮華經の五字七字を弘むる故なり。釈迦仏・多宝仏、未来日本国は一切衆生のためにとゞめをき給ふ処の妙法蓮華經なりと、かくの如く我も聞きし故ぞかし。現在の大難を思ひつゞくるにもなみだ、未来の成仏を思ひて喜ぶにもなみだせきあへず、鳥と虫とはなけどもなみだをちず、日蓮はなかねどもなみだひまなし。此のなみだ世間の事には非ず、但偏に法華經の故なり。若ししからば甘露の涙とも云ひつべし。涅槃經には父母・兄弟・妻子・眷属にわかれて流すところのなみだは四大海の水よりもを多しといへども、仏法のためには一滴をもこぼさずと見えたり。法華經の行者となる事は過去の宿習なり、同じ草木なれども仏とつくらるゝは宿縁なるべし、仏なりとも権仏となるは又宿業なるべし。

此の文には日蓮が大事の法門どもかきて候ぞ。よくよく見ほどこさせ給へ、意得させ給ふべし。一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給へ。あひかまへて、あひかまへて、信心つよく候ふて三仏の守護をかうむらせ給ふべし。行学の二道をはげみ候べし。行学たへなば仏法はあるべからず。我もいたし人をも教化候へ。行学は信心よりをこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ給ふべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。恐々謹言。

五月十七日

日蓮花押

最蓮房御返事

追って申し候。日蓮が相承の法門等前々かき進らせ候ひき。ことに此の文には大事の事どもしるしてまいらせ候ぞ。不思議なる契約なるか、六万恒沙の上首上行等の四菩薩の变化か。さだめてゆへあらん。総じて日蓮が身に当たつての法門わたしまいらせ候ぞ。日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にもやあるらん。南無妙法蓮華經と唱へて日本国の男女をみちびかんとおもへばなり。經に云はく「一を上行と名づく乃至唱導の師」とは説かれ候はぬか。まことに宿縁のをふところ予が弟子となり給ふ。此の文あひかまへて秘し給へ。日蓮が己証の法門等かきつけて候ぞ。とゞめ畢んぬ。